

カーソン・マッカーズのバラードの世界

辻 武 男

「グロテスクなものが崇高なものと対応する南部文学の『ゴシック』派と呼称されるものは、南部における人間の生命の安っぽさに大いに原因があるのではないか、と私は時々思う。⁽¹⁾」とマッカーズは述べたが、『哀しい酒場のバラード』(*The Ballad of the Sad Café* 1951)はゴシック小説ではあるが、主題として「人間の生命の安っぽさ」を扱った作品ではない⁽²⁾。主題は彼女の処女作『心は淋しき狩人』と同様、愛とその挫折そして孤独である。舞台は「世界のいかなる場所からも遠く懸け離れた」アメリカ南部の淋しくも悲しい田舎町である。この作品の冒頭はこの町の雰囲気をも的確に伝えている。

《町自体がわびしい。紡績工場や労働者が住む二間造りの家、数本の桃の木、色ガラスの窓がふたつある教会、そして百ヤードしかない惨めな目抜き通りを除けば、たいして何も無い。(中略)この冬は短かくてうすら寒く、夏はギラギラする陽の光で白く火のように暑い。

八月の午後目抜き通りを歩いてもすることは全く何もない。⁽³⁾》

倦怠と孤独の雰囲気がこの町を覆い、カメラ・アイは町の丁度中心にある一番大きな建物に向けられる。この古い家はひとつを除けばすべての窓が板でふさがれ、右の方にひどく傾き「今にも倒壊しそうにみえ」、「奇妙なひび割れたような表情」(a curious, cracked look)をしている。マッカーズの先輩作家である W. フォークナーの『エミリーへの薔薇』の主人公ミス・エミリーの屋敷が丁度彼女の内面と照応して「棉花を運ぶ荷馬車やガソリン・ポンプの上にかたくななあだっぽい凋落の姿」を見せていたのと同じ device で、「今にも倒壊しそうにみえ」、「奇妙なひび割れたような表情」をもつこの屋敷は精神的な死に瀕したこの中編小説の主人公ミス・アメリカの心的状況を物語るものである。二階のただひとつ板でふさがれていない窓から暑熱が最もひどい午後遅く手がゆっくりよろい戸をあけ、顔が町を見おろす。その顔は「夢の中で見る恐ろしいぼんやりした顔」に似ており、白くて性別もなく、ふたつの灰色の斜視の目は「互に長く密かな悲しみの目差を交換しているように見えるほど、鋭く内側に向けられている」。

『哀しい酒場のバラード』はその題名が示すようにバラッドであり、その形式を意識して incremental repetition が効果的に使われている。

《こうした八月の午後仕事時間が終るとすることは全くない。フォックス・フォールズ道路へ歩いて行き鎖につながれた囚人達(chain gang)の声に耳を傾けるがよい。⁽⁴⁾》

この後町にかけて酒場があったこと、そしてこの酒場の持主ミス・アメリカとこの酒場の成功と賑いの一番の原因となった従兄のライモンと呼ばれる僂僂男とミス・アメリカの前の夫で恐ろしい人物マーヴィン・メイシーに語り手は簡単に言及する。以上がこの酒場の物語の導入部である。展開部は雑貨店を営む30歳のミス・アメリカの紹介で始まり、flashback の手法を用い、この物語の過去へと遡り、いかなる理由でこの酒場が出来たかを説明する。クライマックスは、ミス・アメリカとの恐ろしい10日間の結婚に失敗し、その後再び悪の道に走ったマーヴィン・メイシーが刑期を終え町へ舞い戻り、ミス・アメリ

アと酒場を破壊する復讐劇である。再び時間は冒頭の荒廃したわびしい町の場面に帰り、円環は閉じられる。

マッカーズのこの作品は民衆の中から生まれ口承で伝えられるフォーク・バラッドと異なり、「文学的バラッド⁽⁶⁾」と呼ばれるべきものだが、バラッド特有の単純、素朴な物語形式を取りながらも、「『バラッド』は愛の性質についての充分に発達した理論とともに、わずか60頁の中に彼女の前の小説の哲学を含んでいる⁽⁶⁾」と言われるように、相当複雑な内容をもっており、さらにバラッド形式にゴシックの要素を巧妙に取り入れ陰翳の濃い作品になることに成功している。L. グレイヴァーはこの中編小説について、「(彼女より)ずっと優れた心理学的知見と構成技量をもった作家達と競おうとはせずに、マッカーズ夫人は彼女の才能により合致した限られた領域——つまり、伝説とロマンスの異国的で根元的な世界——の中を賢明にも動いている。⁽⁷⁾」と言っているが、マッカーズは *milieu* を世界のどこからも遠く懸け離れた南部の小さな田舎町に設定することにより、典型的な形で、つまり原型的な形で、この愛と憎しみのドラマとそれに対する人々の反応を描き、ほとんど時と場所を超越し、普遍的といい印象をこの作品に与えている。この共同体はそれ自体の論理により直線的に進歩する現代の社会とは無関係に季節の循環のもとに生活を営んでいる。かつては酒場もなかった。飼料やグアノやひき割りとうもろこしやかき煙草を扱う雑貨店を経営し3マイル離れた沼地に蒸留酒製造所をもつミス・アメリカは町一番の金持で6フィート2インチもある大女であり、道路で石につまずきでもすれば、そのことでなにか訴えるものを探すかのように本能的にあたりを見回す、と町の人々に噂されるほど訴訟好きでけちであり、その一方では全く相矛盾するが無料で彼等の病気を診療し、伝説的人物として設定されている。一般には知られていない処方薬を調合し夜通し蒸留器の弱い火を見守る彼女は魔女を想起させる。そしてミス・アメリカが30歳になった年の春にこの町に変化が起きる。その場面をマッカーズは平明な文体で印象深く描いている。

《4月のあるおだやかな静かな夜の真夜中にかけてであった。空は青い沼地に咲くあやめの色だった。月はさやかで明るかった。その春の作物の出来具合は上々だった。この数週間紡績工場は夜業をしていた。むこうの小川の側の四角いレンガ造りの工場は灯りで黄色く、そして機のかすかな断え間のない音がしていた。⁽⁸⁾》

あたりには花と甘い春の草のかがりが近くの潟の生ぬるい鼻をつくにおいと交り合っている。通りには人影はなく、ミス・アメリカの店の前のヴェランダには彼女と4人の男がいる。そこへ小人の僂僕男がやってくる。

《彼は4フィートそこらであり、膝までしかないみすばらしい埃をかぶったコートを着ていた。彼の曲った (*crooked*) 小さな脚はゆがんだ (*warped*) 大きな胸部の重みと背中のかぶを支えるには余りにも細すぎるようにおもえた。彼の頭はとても大きく青い眼はくぼみ口元は鋭く小さかった。彼の顔はおだやかでしかも生意気であり——丁度その時の彼の青白い顔は埃で黄色く両眼の下にはうす紫色の影があった。彼は一本のロープで結び一方に傾いたスーツケースをもっていた。⁽⁹⁾》

この僂僕男が従兄のライモンである。精神と肉体の健康な融合を理想としたのがギリシア精神だとするならば、それに比べてマッカーズの描く人物は何とグロテスクな姿をしていることだろう。斜視の大女ミス・アメリカも一種の畸形といえるし、彼女のかっての夫マーヴィン・メイシーもまた「ほとんど臭いのように彼の軀について離れない謎めいた

卑劣さ (a secret meanness)」をもち、8月ですら汗をかかない彼には爬虫類のイメージがある。そういえば道路沿いの桃の木もまた、ゆがんで (crooked) いじけて (dwarfed) いるのだ。マッカーズがこのように畸形 (freaks) を偏愛するのは、W. P. クランシーの指摘する通りであろう。つまり、彼はマッカーズの畸形は正常なもの (the normal) の象徴として使用されているといい、その事情を次のように説明する。

《彼女の世界の奇妙で恐ろしいものの背後で人間精神の最も暗い悲劇が演じられる。彼女が描く啞や僵僕は、おそらく、グロテスクなものの衣装をまとった姿を見ることにより生じる衝撃の中にのみ確認される程人間にとってあたりまえ (native) になった複雑な事態 (complexities) と挫折 (frustrations) を物語るのである。彼等は毎日通りで私達の横を通り過ぎる。が、私達が彼等に気付くのは傍を通る彼等が片足を引きずる時に限られる。⁶⁰⁾》

人間が生きていく上でさげがたく直面する「複雑な事態」とその中で自己の欲求を実現出来ず遭遇する「挫折」は、この作品では主として従兄のライモンの子供っぽいエゴイスティックな背信と裏切りという形で表明されている。そしてこのような悲劇的状况を克服するものとして、それがいかにもろくはかないものとはいえ、愛があり、その具体的表現ないしは象徴としてミス・アメリカの「酒場」があった。ミス・アメリカが醸造するウィスキーは日常の生活の中でどこかに置き去りにして忘却してしまい、「埋れた生 (buried life)⁶¹⁾」となった詩的真實を意識の表に浮び上がらせる力をもっている。「おそらくそれ (ミス・アメリカのウィスキー) がなければ酒場は出来なかったろう」と語り手は強調する。

ミス・アメリカはヴェランダにいた4人を後に残してライモンを家に入れ、彼に食事とベッドを与える。翌日の正午までに、僵僕男の話は町中にひろまる。2日目には聞く人の心を震撼せしめるような話を町の人々は捏造する。「僵僕男、沼地での真夜中の埋葬、ミス・アメリカが町の通りを刑務所へ引きずられていった」話——マッカーズはこの作品のゴシック的雰囲気醸し出すために町の人々の反応とうわさを巧みに利用している。

町の代表団がミス・アメリカの屋敷を訪れる。彼等の予想に反して、ライモンは生きており、しかもミス・アメリカの新しい赤と黒のチェックのシャツを着て見違えるように清潔にしているのだ。この僵僕男は「普通小さな子供の中のみ見受けられる本能、彼自身と世のすべてのものとの間に直接的できわめて重要な接触を作り出す本能」をもっており、町の代表団とすぐに親しくなる。こうして、酒場が誕生する。

マッカーズは「本物の酒場」の意義を次のように説明する。

《本物の酒場では最も金持で最も貪欲な年老いたならず者でさえ行儀よく誰をも侮辱しない。そして貧しい人々は嬉しそうに周囲を見まわし上品につつましやかに塩をつまむ。本物の酒場の雰囲気は次のような性質を意味する——つまり、仲間意識 (fellowship)、おなかの満足、そして振舞のある陽気さと上品さを。⁶²⁾》

「人間は生まれつき協力的だが、不自然な社会の伝統が彼等をして彼等の最も深い性質とは合致しないような具合に振舞わせる。⁶³⁾」とマッカーズは出版社に送った『啞』(つまり『心は淋しき狩人』)の梗概の中で述べているが、この酒場は人間の生来の善性を導き出すものとして設定されている。

さて酒場が誕生した夜のミス・アメリカの様子はどうか。彼女の眼はこの晩の大半僵僕男の方にも淋しげに向けられていたのであり、「彼女の表情には苦痛と当惑と定かなら

ぬ喜び」があったのだ。つまり、ミス・アメリカは僂僕男を恋してしまったのだ。

こうしてミス・アメリカの酒場は次の4年のうちに徐々に発展する。この酒場の誕生と発展の原因はミス・アメリカの僂僕男ライモンへの愛である。彼女はライモンを「道理を越す程に甘やかした」。アマゾンのような大女が小人の僂僕男を恋していることは町の誰の目にも明らかだった。二人が罪の生活をしていると取沙汰する者もいた。善良な人達は二人が彼等の間にある肉の満足を見出したとしても、それは彼等と神のみに関する事だと言った。そして分別のある人々は二人の性的関係を否定した。語り手はミス・アメリカのライモンに対する愛を次のように説明する。この部分は『哀しい酒場のバラード』の中で最も引用される箇所であり、「説教を始める時のテキストの効果⁴⁴」をもっている。

《まず第一に愛は二人の人間の間の共同経験 (a joint experience) である。しかし、それが共同経験であるという事実は、それが関係する二人にとって類似した経験 (a similar experience) であることを意味しない。愛する者 (the lover) と愛される者 (the beloved) がいるが、この二人は異った地方から来ているのである。しばしば愛される者は愛する者の中でこれまで長い間静かに貯えられた愛のすべてを刺戟するものにすぎない。そしてどういう訳か愛する者は誰もこの事を知っている。彼は新しい奇妙な孤独を知るようになる。彼を苦しめるのはこの認識である。それで愛する者がなすべきことは唯ひとつ、彼は出来る限り彼の内部に彼の愛をかくまわ (house) ねばならない。彼は彼自身のために全体的な新しい内的な世界 (a whole new inward world) を造らねばならない。強烈で奇妙な彼自身の中で完結 (complete) した世界を。我々が話しているこの愛する者とは必ずしも結婚指輪のために貯蓄している若い男とは限らないことをここで付け加えておこう。この愛する者とは男でも女でも子供でも、あるいはこの地上のいかなる人間でもよい。

さて、愛される者はいかなるものでもよい。最も異様な者でも愛の刺戟となりうる。(中略) 愛される者は腹黒く汚ない頭をし悪習に染まっているかもしれない。そう、そして愛する者は他の誰もと同じように明瞭にこの事を見て取るかもしれない。しかし、それは彼の愛の進展にすこしも影響しない。(中略) それゆえ、いかなる愛の価値も性質も愛する者によってのみ決定される。

私達の多くが愛されるよりむしろ愛そうとするのはこの理由による。殆んどすべての者が愛する者であろうとする。そして手短かに本当の事を言えば、愛されるという状態は深く謎めくが多くの人にとって耐えがたいということである。愛される者は愛する者を恐れ憎む、そしてそれには最上の理由がある。というのは、愛する者は常に彼が愛する者を裸にし (strip bare) ようとするからだ。愛する者は愛の対象といかなる可能な関係をも渴望する、たとえこの経験が彼にただ苦痛のみをもたらす結果になろうとも。⁴⁵》

マッカーズは、W. ブレイク風に言えば、「愛の神秘」 (love's secret) を強調している。すくなくともその効果を狙ったのは明らかだ。マッカーズのこの愛の理論のなかで、ミス・アメリカのライモンに対する愛を裏づけるものは「愛される者はいかなるものでもよい」という箇所である。この愛は、例えば対象が美しいとか裕福であるとか、そうした場合の「価値」への愛とは限らない。むしろ、そうした社会通念としての「価値」への愛にマッカーズは挑戦しているような趣きすらうかがえる。またそれゆえに、彼女が描く愛はグロテスクにならざるをえないのだ。

マッカーズの愛の理論の中には我々の常識である程度理解出来るものもある。例えば、

愛は「共同経験」ではあるが「類似した経験」であるとは限らない、という場合である。個人の資質とか履歴が異なれば、愛が「共同経験」ではあっても、それに対する反応は異なるからだ。批評家はこのマッカラーズの愛の理論を何とか合理的に解釈し、この作品の意味を解明しようとした。I. ハッサンはマッカラーズの愛の理論から、「愛することは苦しむこと、人の孤独を強めることである。愛はいかなるお返し (reciprocation) をも必要としない、その性質はただ愛する者によってのみ決定される、そしてその対象は世の中が差し出すいかなる『異様な』ものであってもよい。⁹⁰⁾」と要約するのだが、ミス・アメリカのライモンに対する愛は、この作品の中で「ミス・アメリカの仕合せな愛⁹¹⁾」と説明されている通りであり、「苦しみ」でも「孤独を強めるもの」でもなかった。すくなくとも、ライモンが彼女の前におり彼を愛することが出来た間は彼女は仕合せだったのだ。

また、ミス・アメリカは彼女の内部に出来る限り「愛をかくまい」自分のために「全体的な新しい内的世界」を造りはしなかった。彼女は「内的世界」に閉じこもることなく、心をひらき、ライモンにすべてを与え彼を愛したのである⁹²⁾。

さらにまた、ライモン (愛される者) はミス・アメリカ (愛する者) を「恐れ憎む」ことはなかった。「自分を愛してくれるにもかかわらず、ではなくて、自分を愛しているがゆえに相手を軽蔑する⁹³⁾」という心理は、エヴァンズが指摘するように、マッカラーズが17歳の頃書いた「お人よし」(Sucker) という短編に、うかがえる⁹⁴⁾が、自分を愛する者を「恐れ憎む」という心的状況は、『哀しい酒場のバラード』だけでなく、彼女の他の作品においても、マッカラーズは描くことは出来なかった。R. クックは、愛される者が愛する者を恐れる理由を「愛を返すことが出来ないが故に愛される者は愛の謎めいた力 (unknown powers) を恐れる。(中略) 彼は、愛する者が彼から彼の個性 (individuality) を奪い、彼を所有しようとするのを恐れる。⁹⁵⁾」と説明している。確かに、ライモンを過度に甘やかしたミス・アメリカの愛には所有欲が働いていたことは充分考えられる。しかし、そのためにライモンは脅威を感じたりすることはなかった。彼はミス・アメリカの自分への愛を利用し威張りすらしたのである。エヴァンズは「『哀しい酒場のバラード』のマッカラーズ夫人によれば、これ (愛される者が愛する者を憎むこと) は人間に永遠の孤独な監禁状態を宣告した自然の恐るべき法則である。最早脱出の可能性すらない。⁹⁶⁾」と言うが、「愛される者は愛する者を恐れ憎む」という心理は異常であり、それを一般化したマッカラーズは、いわば「文学的勇み足」を犯したことになり、そこから結論を突き出したエヴァンズの言葉もやはり「文学的勇み足」と言えるだろう。「文学的勇み足」と言ったが、この場合「文学的」とは、それがゴシックの特徴である恐怖と神秘感を作品に与えているからである。以上マッカラーズの愛の理論とそれに対する批評家の対応を若干検討してきたがこの作品の愛の性質を説明するものは、主として愛の対象はいかなるものでもよいという主張であり、これを除けば、マッカラーズの愛の理論は『哀しい酒場のバラード』における愛の実際を説明する上であまり役に立たない。そして『バラード』における愛の実際を最も的確に説明しているのは、J. ヴィカリーである。

《愛の原型的な (archetypal) な型は『哀しい酒場のバラード』において最も明瞭で最も単純なかたちで呈示されている。というのは三人の主要人物の各々は引き続き愛する者と愛される者となるからだ。その場合、各々は彼が愛しているか、愛されているかに従って代わる代わる奴隷となり暴君となる。登場人物が同時に心の変化を来たすことを拒否したり、それが出来なかつたりすることがプロットを構成している、からみ合ったロマンテ

ィックな三角関係 (triangle) をつくり出している。一方、グロテスクな喜劇は、各々が彼等が別の人物に対して軽蔑的に拒否した役割に代わる代わる従うことから生じる。⁶⁴⁾》

愛についての「説教」の後、ミス・アメリカのかつての夫マーヴィン・メイシーの変心あるいは変身の物語が語られる。ミス・アメリカの従兄を名乗るが、その根拠は曖昧で、その謎めいたエゴイズムのために、読者にやりきれなさを感じさせるライモンと違い、マーヴィンの場合は苛酷な生い立ちの様子が説明され、彼の邪悪さは理解可能なものになっている。マッカーズはここで社会派的な関心を示しており、環境が人間の性格に及ぼす影響に充分注意を払っている。

さて、マーヴィンはこの地方で一番の美男であり、邪悪な人物と知りつつも彼を愛する娘達を辱かしめ墮落させた。少年の時には喧嘩をし「剃刀で殺した男の「乾いた 塩づけの耳」を持ちまわり、ポケットには失意し死へと引き寄せられる人々を誘惑するために法が禁ずるマリファナの煙草を入れていた。そして22歳の年に選りも選って斜視の大女ミス・アメリカを結婚の対象としたのである。マッカーズはその理由を彼女の金のためでなく、ただ愛からであったと断っている。愛の対象はいかなるものでもよいのだ。愛はマーヴィンの性格を一変させた。彼は善良で礼儀正しくなり、節儉をおぼえ、紳にすら手を差しのばした。そして2年後彼はミス・アメリカと結婚した。ミス・アメリカは彼女の所に治療に来る患者から婦人病の名前を聞くだけで恥かしさで顔が暗くなる程性を恐れる女であり、それゆえ彼女がマーヴィンと結婚したのは、エヴァンズが推測するように親しい話し相手 (companionship) が欲しかったからであろう⁶⁵⁾。

ミス・アメリカはセックスを拒否した。そして近寄る夫に暴力を振り屋敷からたたき出した。この恐ろしい結婚生活は10日続き、その後、町では「グロテスクな出来事」として長い間笑い種となった。それから数年後ライモンがこの町にあらわれると、運命の歯車は180度回転し、ミス・アメリカは「愛する者」、つまりかつてマーヴィンがそうであったように、「愛される者」の奴隷となる⁶⁶⁾。この愛もまたミス・アメリカを変えた。彼女は社会的となり、ライモンへの愛はこの町に酒場をもたらした。酒場は賑い、町やそこに住む人々の生活まで変えた。「酒場に変ったミス・アメリカの飼料店は共同体に起った価値の甚大な変化を象徴している⁶⁷⁾」とクックは言う。マッカーズはミス・アメリカの酒場の意義を酒場が客に与える自負心 (self-pride) に求める。「人生は生きるために必要なものをただ得るための長く不確かな奪い合い」なのであり、その過程で自分の生命は安っぽいという自覚を人間は強いられるのだ。ミス・アメリカの酒場はこの苦い自覚から人間を解放し、再びクックの言葉を借りれば、「威厳⁶⁸⁾」を与える。それは「自負心」と言い換えていい。「人生の饗宴⁶⁹⁾」に参加しているという自信であり誇りである。

ミス・アメリカの仕合せな愛の生活と酒場の繁昌は6年続いた。しかし「彼 (マーヴィン) の情熱と数々の犯罪の思い出と刑務所の独房の中に囚れの身となった彼への想いはミス・アメリカの仕合せな愛と酒場の賑いの下」を「不穏な底流」のように流れていたのだ。復讐は確実である。マーヴィンが釈放されたのだ。ミス・アメリカにとって最後の仕合せな収穫の秋が過ぎ、寒い季節がやって来た時、彼は町へ舞い戻る。ライモンはマーヴィンを見るやいなや彼を恋してしまう。彼に取り入るために、ライモンは大きな青白い耳を驚くべき早さでぴくぴく動かすのだ。そして哀れな犬のようにマーヴィンの後をついてまわる。「愛する者」になったライモンはマーヴィンの奴隷である。こうして「愛する者」と「愛される者」、「奴隷」と「暴君」となったマーヴィンとミス・アメリカとライモンは

愛の三角関係を完成する。

マーヴィンはこの町に不幸をもたらす。翌日天気は突然変わり、朝早くからべとべと蒸し暑くなった。屠殺した豚は腐敗し死者までだした。町の人々はマーヴィンがアトランタの刑務所で魔法をおぼえたに違いないと考え恐れた。1月の最初には奇蹟的に雪が降って人々を驚かせた。マーヴィンはこの奇蹟を自分のせいだと主張した。マーヴィンがミス・アメリカの屋敷に住むようになると酒場を訪れる客はますます多くなり、ミス・アメリカとマーヴィンの決闘の時期が熟するのを見守る。

決闘は2月2日、つまり聖燭節に行われた。ミス・アメリカはこの日にそなえてボクシングの稽古に使っていた砂袋のロープを切った。血まみれの胸をした一羽の鷹が町の上空を飛び、ミス・アメリカの地所のまわりを二度飛んだ。僂人のライモンは1日中落ち着かず、玄関のヴェランダのペンキ塗りをした。田舎からは大勢の人がこの決闘を見物に来た。マッカラーズは以上のように喜劇的タッチでゴシックの要素を交えながら、クライマックスの準備をする。最後に彼女は周到にも **magical number** に言及する。

《7は人気のある数字である、そしてそれはとりわけミス・アメリカの好きな数字だった。しゃっくりには水を7口、首の筋違えには水車用貯水池のまわりを7回走る、虫下しには「アメリカ奇蹟通じ薬」を7服——彼女の治療は殆んど常にこの数字にたよっていた。それは種々の可能性をもった数字だった、そしてミステリーと魔法を愛するすべての人がそれを重んじる。それで決闘は7時に行われることになった。》

半時間余りの恐ろしいボクシングとレスリングの試合の後、マーヴィンを床にねじ伏せ首に手をかけたミス・アメリカに勝利の女神が微笑みかけた時、12フィート離れたカウンターから鷹の翼がはえたかのように空中を飛んでライモンがミス・アメリカの背中をおそい、そして彼女は敗北する。マーヴィンとライモンは酒場と蒸留所を破壊し、ミス・アメリカに毒を盛り、復讐を果して町を去る。その後、愛する対象を失なったミス・アメリカは発狂したオールド・ミスのようにやせ細り、3年間毎晩玄関の上り段に坐りライモンの帰りをむなしく待った。

《一度誰かと一緒に暮らすとひとりで暮さねばならないということは大変な苦しみである。突然時計が時を刻むのを止めた時の火に照らされた部屋の静けさ、がらんとした家の中の不安な物影——ひとりで生きる恐怖に直面するより不倶戴天の敵を受け入れた方がましなのだ。》

これはマッカラーズの信念であり、すべての人間に対する彼女のやさしさの原因でもある。孤独は精神的な死なのだ。僂男は帰って来なかった。4年目にミス・アメリカはチャーホウの大工を雇い屋敷をふさいだ。場面は物語の最初に戻る。

《そう、町はわびしい。8月の午後道路には人影はなく、埃で白い、そして頭上の空は鏡のように明るい。何物も動かない……町ではすることが全く何もない……魂は退屈で腐る。フォークス・フォールズ道路へ行ってチェイン・ギャングの声に耳を傾けるがよい。》

酒場の物語は「12人の死すべき人間」というエピローグで終る。町から3マイル離れたフォークス・フォールズ道路では12人の囚人が強制労働に従事している。黒と白のしま模様囚人服を着、足首は鎖でつながれている。彼等はつるはしをふるいながら歌をうたう。

《ひとつの暗い声がなかば歌うように、そして問いかけるように1楽句を始める。そし

て寸刻後別の声に加わり、すぐに囚人全部が歌うのである。歌声は金色の強い日差しの中で暗く、音楽は複雑に混り合って、陰鬱であると同時に楽しくもある。音楽は高まりついにはその音は一団の12人の人間からではなく、大地そのものから、あるいは大空から湧いてくるように見える。それは心をひろげ聞く者を恍惚感と怖れで寒からしめる音楽である。⁶⁴⁾》

『哀しい酒場のバラード』におけるこの囚人達の意義は批評家により異なる。例えばエヴァンズは次のように解釈している。

《12人の死すべき人々は全人類を象徴する、そして彼等は精神的孤独の運命から逃れることが出来ないが故に囚人なのだ。彼等と一緒に結びつけているものがまさに彼等を隔てているもの——すなわち彼等の孤独という状況——であるという事実には逆説とアイロニーがある。彼等は歌うこと(愛)を通して一時的に脱出する、そして彼等が彼等の個々の自己同一性(identities)を分解あるいはむしろ溶解しようと試みて一緒に(together)歌をうたうのは重要である。しかし彼等の音楽は「陰鬱であると同時に楽しく」もあるのだ。(すなわち、愛が絶望と混り合っている)⁶⁵⁾》

つまりエヴァンズは12人の囚人を「孤独」という観点から捉えてそれを全人類に普遍化する。一方、ハッサンは彼等の苦痛の意味を重視し次のように言う。

《悲しげにまた希望もなく互に眼を見交すチェイン・ギャングのイメージに人間の状況の寓話を看たパスカルと異なりマッカラーズ夫人は「12人の死すべき人間」の歌の中で今度に限り忍耐と超絶的苦痛の破壊しがたい喜びを首尾よく召喚する。⁶⁶⁾》

《苦痛は……愛以上にすら——例えばチェイン・ギャングのように——四海兄弟という意識(universal brotherhood)の中に人間を結びつける。最早自己への外的なおどしではなくなった苦痛は精神分析家が言うように取り入れ(introjected)られる。それは内的に自己のより高い意識のレベル(higher interests of the self)で働く。このようにしてマッカラーズ夫人の作品の中でただひとつの肯定的な響きは単に苦しみに耐える人々により発せられる。⁶⁷⁾》

このバラードの12人の囚人は理想化されている。つまりマッカラーズは彼等に教訓的意味を託したのである。ミス・アメリカとライモンとマーヴィンの三人が自由な世界に住みながら、彼等のエゴイズムないしは人格的欠陥から、愛を実現ないしは永続化出来ないのに対し、この囚人達は束縛と強制労働という不自由な状況にありながら、歌(同胞愛)を創造した。「孤独」であれ「苦痛」であれ、それが個人に破壊的に働くことなく、愛に成長するためには、それが全人類に共通のものだという認識を前提とする。そしてマッカラーズはまことにさりげなくこの認識を12人の囚人達にみとめている⁶⁸⁾。

《それではそのような音楽を創造出来るこの一団はいかなる類のものであったか? 丁度12人の死すべき人間, 7人は黒人で5人は白人, この郡の出身である。ともにある丁度12人の死すべき人間。(Just twelve mortal men who are together.)⁶⁹⁾》

マッカラーズはいみじくも『哀しい酒場のバラード』の結語として'together'を選んだ。このバラードのエピファニーである。ミス・アメリカがおちいった精神的孤独の対照として、この言葉が物理的意味のみならず、精神的意味をも付与されていることは明らかである⁷⁰⁾。そしてそれゆえ『哀しい酒場のバラード』は象徴的な、というよりむしろ教訓的な意義をもつのである。

〔注〕

- (1) Carson McCullers, *The Mortgaged Heart* (Houghton Mifflin) p. 281.
- (2) この中編小説 (novelette) には「人間の生命の安っぽさ」を指摘した箇所があるが、これがマッカーズのゴシック・ヴィジョンに投影され、この作品の雰囲気^{雰囲気}を決定している。
- (3), (4) Carson McCullers, *The Ballad of the Sad Café* (Penguin Books) p. 7.
- (5) *Dictionary of World Literary Terms*, (ed.) J. T. Shipley (George Allen & Unwin, 1955)
- (6) Frederick J. Hoffman, *The Art of Southern Fiction*. (Southern Illinois Univ. Press, 1967) p. 69. Oliver Evans の “The Theme of Spiritual Isolation in Carson McCullers,” *New World Writing*, I (1952) からの引用。
- (7) Lawrence Graver, *Carson McCullers*, (ed.) Maureen Howard, *Seven American Women Writings of the Twentieth Century: An Introduction* (Univ. of Minnesota Press, 1963) p. 286.
- (8) *Op. cit.*, p. 10.
- (9) *Ibid.*, p. 11.
- (10) Oliver Evans, *Carson McCullers* (Peter Owen, 1965) p. 140. エヴァンズは *Commonweal* から引用している。
- (11) Ihab Hassan, *Radical Innocence* (Princeton Univ. Press, 1961) p. 226.
- (12) *Op. cit.*, p. 29.
- (13) Carson McCullers, *The Mortgaged Heart*, p. 124.
- (14) Oliver Evans, *op. cit.*, p. 129.
- (15) Carson McCullers, *The Ballad of the Sad Café*, pp. 33-34.
- (16) I. Hassan, *op. cit.*, p. 209.
- (17) C. McCullers, *op. cit.*, p. 42.
- (18) ミス・アメリカが「全体的な新しい内的な世界」を造り閉じこもっていたら、彼女は愛する者から裏切られることもなく、悲劇は回避出来ただろう。
- (19) Evans, *Carson McCullers*, p. 131.
- (20) *Ibid.*
- (21) R. M. Cook, *Carson McCullers* (Ungar Publishing Co., 1975) p. 93.
- (22) Evans, *op. cit.* p. 131.
- (23) Hoffman, *op. cit.*, p. 71. “Carson McCullers: A Map of Love” からの引用である。
- (24) Evans, *Carson McCullers*, p. 127.
- (25) 客観的に見れば、ミス・アメリカはライモンの奴隷に外ならぬが、彼女の主観に則していえば、それでも彼女は仕合せだったのだ。
- (26) *Op. cit.*, p. 89.
- (27) *Ibid.*, p. 90.
- (28) James Joyce, *Dubliners* (Penguin Books) p. 114.
- (29) Carson McCullers, *The Ballad of the Sad Café*, p. 77.
- (30) *Ibid.*, p. 72.
- (31) *Ibid.*, pp. 83-84.
- (32) *Ibid.*, pp. 84-85.
- (33) Evans, *Carson McCullers*, pp. 133-134.
- (34) *Op. cit.*, p. 226.
- (35) *Ibid.*, pp. 210-211.
- (36) したがって、12人の囚人が全人類を象徴する、というエヴァンズの見解は間違っている。彼等

はミス・アメリア達と異なり〈意識化〉した存在である。

37) *The Ballad of the Sad Café*, p. 85.

38) マッカーズが囚人という形でしか〈連帯〉を呈示出来なかったところに現代の社会における〈連帯〉の困難さが暗示されている。

(昭和54年10月31日受理)